

論文概要書

題名 近代日本の小説と読者に関する研究

(副題名) 読書論の立場からの表現分析

和田敦彦

## 論文概要書

題名 近代日本の小説と読者に関する研究  
(副題名) 読書論の立場からの表現分析

和田敦彦

### 第一章 読書論からとらえ直す日本文学

——領土的な思考を越えて——

#### 一・一 近代日本の「文学」という枠組み

第一章では、一言で言うところ、「学」の「領土的思考」を揺さぶるための読書理論の有効性、が問題になっている。「領土的思考」とは、ある学問領域が超越的で自明の存在であることを保証する思考である。歴史について語る言説、文学について語る言説、動物の生態について語る言説。それらは一体「誰が」語っているのか。その多くは普遍的で、超越的な場所から語られる。つまり、事象を解釈する研究者という主体自身の（政治的、歴史的、社会的等々に）限定された特殊な場所を、普遍的で超越的な解釈する主体の場所へと持ち上げることにによってそれぞれの「学」内における客観性や妥当性をもった語りが可能になっている。したがって、情報の解釈者自体の追求、検討は、それぞれの学問領域の言説の自立性を支えている根幹の部分にかかわる問題を提起してくれるはずなのだ。

以下、この章では三つの主要なポイントに重点をあてて話を進める。第一に、「文学研究」という領域において、読書あるいは読者自体への検討を抑圧することが、その領域を支える有効な方法として機能してきた、という歴史的な事情を明かすこと。また、その際いかなる問題が問えなくなり、隠蔽されてきたのかを明かすこと。それはまた読書を問題にすることで、開けてくる問いの地平を示すことでもある。第二に、そうした場合に論じつつ用いている用語「読者」について、その概念や用法についての批判的な検討を行うこと。どのような用い方をすることで、どのようなメリットとデメリットが生まれてきたのか、をこれまでの読者に関する理論的な言説を検討しつつ考えること。第三に、それらの批判をふまえながら、「読者」という用語の用い方についての試案を示しながら、この論の全体の展開を素描しておくこと。

この論での試みはまた、「学」が自明のようにして用いている用語や修辭、学術的な文体の修辭自体を問い直す作業、あるいはそうするための道具立てを提供する作業ともなるだろう。というのも、ほとんどの意識せずに用いている学術的な用語や修辭、言い回しは、多くの場合個人、あるいはある集団の下した諸々の事象に対する解釈を、まるで普遍的な解釈であるかのように装わせる機能を負っているし、解釈するという自身の行為自体を「見なかつたことにしよう」とする傾向を帯びるものだ。読みの理論は、絶えずおいてこそその力を発揮する。

#### 一・二 解釈という方法

「藪の中」論からのアプローチ

まずそうしたねらいから、「藪の中」を取り上げて論じる。というよりも、「藪の中」論を取り上げる。一人称によって語られるいくつかの話が互いにずれてゆくことで、一人称によって語られる言葉の信頼性のもろさや不安定性が読者になげかけられる仕組みをもつ「藪の中」。それをめぐる諸論は、ここでの問題を扱うにあたって都合がよい。つまり、それぞれの読み手が、ある時はあからさまに、またある時はそれと知らずに前提としている様々な読みの規則や慣習（どの登場人物の言葉を、いかなる理由で信じ、疑い、また、それらからどのようなことを読み取ることが価値あることと論者が考えているか等）、そしてそれをいかにして普遍的で一般的な、信頼のおける見解として偽装することができると、というそれぞれ論者の仕事を対象化するためには格好の材料なのだ。

ここで論じるのは、あくまで読者によって多様な人物や出来事の構成が可能であるとか、その場合に作るテクスト内外の諸要因も多様であるとか、そのような自明のことを言いたいためではない。また、こうした読者の解釈する行為そのものへの検討、疑問を活性化するとところから「藪の中」の作品としてのすばらしさを標榜するためでもない。問題は読書を、そこにみなざる解釈の欲望と権力をどこまで議論の俎上にのせることができるか、なのだ。それぞれの論にみなざる、「作者の意図」、「作家の価値」、「テーマの確定」を求める欲望、そのために「テーマの一貫性」や「出来事の完結性」や「意図の明瞭性」や「意味の豊饒性」を求める欲望。こうした解釈の諸々の領土にテクストを奪い取りたいという欲望。そして雑誌や教場という「場」を通じて、無数の読書を己の領土へと繰り入れようとする欲望。それによつ

て維持されている「教育者」という特権的な解釈者の階層性。そうしたことを問うという姿勢を設定したかったのだ。

### 一・三 「読者」という用語をめぐる

「読者」に類する用語を用いる場合、その規定の仕方を問わずその用法に共通して見てとれる二つの傾向を考察することができる。つまり、「読者」における差異を抑圧しようとする傾向が強いのか、逆に「読者」の差異を顕在化し、見いださせようとする傾向が強いのか。つまり差異抑圧的か、差異顕在的か。読者という用語を、それ自体一般的な用語として概念規定しようとすることは、極めて差異抑圧的な「読者」用語の用法を生むだろう。それによって様々な状況に置かれている私たち読者の差異を、多かれ少なかれ一般

では「読者」あるいは「私たち」といった用語は、常に「読者」という用語における差異を見いだせるよう利用することができるだろうか。だが、常に「読者」の差異を際立たせることなど、ではしない。それは「用語」の逃れがたい特性だ。しかし、常に自身の用いている用語「読者」が、どのような面で「読者」の差異を明らかにし、どのような面で「読者」の差異を抑圧しているかをチェックすることはできる。重要なのは、自身の用いている用語「読者」が、いかなる面で「読者」の差異を抑圧しているか、「読者」の差異を明かしているのか、をも考えることだ。そのうえで、自身の用いた用語が抑圧している「読者」の差異をより顕在化させるような用法を考えて行けばよい。以下の章では、このことに注意しながら議論を展開して行くことになる。

常に自身の用いる用語「読者」がいかなる意味で「読者」における差異を抑圧する機能を帯びるかを批判的に検討してゆく姿勢が必要だ。むしろ（純粹に）差異顕在的な用い方をしようなどと言っているのではないし、繰り返すが、そのようなことはできない。しかし、常に「読者」という用語を用いるときに自身が排除してしまう「読者」を問うこと、「読者」という用語で一般化すること、そこにある個人的な、歴史的な、地域的な差異がどのようにに隠蔽され、どのようにに問えなくなるかを発見すること。そのような発見の道具としての効力を「読者」用語が失ってはならない。読書論が一つの領土として研究用語を増やすだけに終わるか、歴史性を回復してゆく糸口をつかむかは、まさにこの地点にかかっている。

以下の展開を「読者」用語の用法と絡めて簡単に概観しておこう。第二章では、主に読者を、その過程的な差異のもとに描き出したい。文学テクストの言語を記述してゆく場合、現代では様々なそのための用語が流通している。語り、人称、時制、等の小説の基本的な時空間を形作る要素から、出来事の配列や登場人物の行為や思考の説明、評価のための用語まで。だが、テクストの言語の上での形態的な特徴についていかに詳細に記述しようが、まさにそのテクストの意味を実現するはずの読者との関係、読者に対する効果や作用については明らかにならないままだ。それ自体自立し完結したスタティックな構造として記述されるテクスト。そうではなく、それらがいかに理解され、享受されるのかという言語の理解過程に着目した。つまり言語への問いから言語の作用、理解のプロセスへの問いへ展開して行く。そしてその時に見いだされるそれまでの用語や概念で抑圧されてきた問題を見いだして行く。そこでは「読者」という用語を通じて小説の世界を作り上げて行く読み手の過程を描き出す道具立てとして用いられることとなるだろう。

ただし、こうした「読者」用語の用法で抑圧されている「読者」の差異があることを忘れてはならない。第二章では、言語と読者との作用関係を問うことによって、そうした問題を抑圧して、言語やテクストの自立的な構造記述を行う思考や用語を批判し、そしてまたそれによって読者の役割や能力を積極的に論じる視界も開いてゆこうと努める。だがその試みは、小説の言語と読者の作用関係を記述する心理的、内面的で非歴史的な記述になりがちだ。第三章では、読みの慣習、性質の歴史的な差異を浮かび上がらせるような概念として読者という用語を機能させるよう利用する。つまり、読書、言語とその理解のプロセスの歴史的な生成、変容といったことを考えて行けるような姿勢を、そうしたことをも有効に考察できる道具立てとして「読者」の用法を探索してみたい。現在の読みの慣習、理解の枠組みがどのように生まれ、強化され、広がっているのか、それはどのような問題を引き起こすのか。それはどのようにして明かすことができるのか。改変してゆくことができるのか。例えば特定の小説の言語は、その中でどう機能し得るのか。そこでは「読者」は歴史的な諸制度の中での形成されてゆく過程的な差異を明かしてゆく手だてとして用いられるだろう。

第四章では、やはりそれまでの第二、第三章での「読者」用法に加えて、さらにそれまでの用法では問題にできなかった「読者」の差異を明かすような用法をも考えたい。確かに読みの約束事や理解の枠組みがいかにして生まれ、強化されてきたかを描き出すことはできる。また、それがどのような実際の諸制度に支えられ強化されているか、といった点も見いだしてゆけるだろう。けれど、なおかつまだ問題にでき

ていない「読者」の差異は限りがない。例えばここでの論の記述にしたところで、極めて限定された、特定の「読者」集団と市場をあてにして書かれている。それは文学についての言葉を語る特権的な読者集団かもしれない。そういえば「文学のみ」の表現にとさら言及しているのも考えてみれば特殊なことなのだ。第四章では、「読者」を、その広さや層の特殊性、差異のもとに描き出すことに努めよう。それはまた、文学に限らない多様な記号表現を問題にすることにもなる。掲載方法や掲載媒体、販売方法といった、ある書物を読んだり買ったりして手に入れる読者の広さや層の特殊性、差異、あるいはそれによって生まれる読み方の差異、それによって生まれる解釈者集団の規制力のゆくえがそこでは問題となるだろう。そこでは「読者」はそのように社会的な、あるいは経済的な諸制度のもとで機能する集合体としての「読者」の差異を明かしてゆく用語として用いられるだろうし、そのために有効な用語や概念として練りあげてゆくよう努めよう。

## 第二章 近代小説の語りと効力

### ——読者にとっての語り——

#### 二・一 小説について語る言葉

この章では、おもに次の点に重点をおいて展開する。まずは小説の言語について語られた言葉をチェックすること。言語の形態について、あるいは小説の技法について語る言葉が、実を言うと、そう読んで読む読みの認識の過程であること、言葉に対する信頼や判断の様々なプロセスだということを論じよう。さらにこれに関して、ナラトロジーについての記述、用語を批判的に検討する。語りの「形態」の記述は、その語りについての読み手の判断（あるいはその判断の歴史的、社会的な特異さ）の問題をしばしば見失わせ、問い難くしてしまう傾向が生まれることを批判的に論じて行く。その後で、徳田秋声『足跡』の表現を中心に追いながら、そうした形態を分析する道具立てや用語から様々な逸脱し、逃れている文学テクストの表現について問題にしよう。その時にも、読者がいかにしてその言葉を受け取ってゆくかという読者側の読みの過程に重点をあてて考えてみたい。もとより、ここでのねらいは、読む行為自体を射程に入れた論じること、問いがたかかった問いを発することにあるが、それはまた、これまでに見いだせなかったテクストの可能性を見いだすことにもなるだろう。それを「呼びかけ小説」という手法について考える

ことで行いたい。詳しくはそこでのべるが、一言で言えば、二人称形式によって「あなた」や「おまえ」というテクストの外部に呼びかけてゆく小説を扱う。そうした手法においては、しばしば呼びかけられた「あなた」や「おまえ」を読者が積極的に構成し、呼びかける表現と呼応して読み進めてゆく点からいって、読みの過程自体を考えることがその効果を明かす有効な手だてとなってくれよう。

この章では特に読者の読みの（過程）に重点をおいているといってもいい。読みの過程を抑圧すること、問わないことによって成り立っている領土的思考の批判であり、読みの過程を問うことによって考えられることの検討である。したがってこの章では「読者」という用語は、その過程的な差異を表すような道具立てとして用いられるだろう。「読者」は、それ自体様々な思考や判断の流動的な過程の中で変貌する。そうした様々な反応の過程的な差異を表すようにこの用語「読者」を用いよう。

読みの（結果）を重視することによってしばしば読みの（過程）への問いが見失われてしまう。解釈は意味生産の（結果）である。そしてここで明かしてゆきたいのは、それがまさに様々な私たちの判断の過程であるということなのだ。この章では、以下いくつかの用語が批判の対象となるだろう。それは言語の「適切性」や「客観性」、「規範的」とか「話している」かのようなど、といった用語である。というのも、これらの言葉は、まさにその言葉を用いている者の「結果的な判断」でしかないからだ。私たちがどのようにして読みの過程においてそのような印象を形作って行くことになるかは、そのような用語を使った瞬間にもはや問うことさえできなくなってしまう。かといってまたこの問題は、そのような印象のもととなった原因（テクストの形態）に還元してしまうこともできない。テクストの形態に還元するのでもなく、読者の結果的な印象に還元するのでもなく、読みの過程にかかわる諸々の問いを立ち上げること。それがここで試みたいことなのだ。

テクストの形態、語り方に主に重心をおきつつ、テクストの読者への効果を論じて行くとき、自身でも十分意識せしめなければ用いてしまうメタファがある。それは例えばある表現や、ある語り方によって、読者は登場人物があたかも「見ているように」「読者が見、感じるとか、登場人物の「目に映っているように」「読者の目に映じる」というような目や身体的な知覚に関わるメタファだ。もう一つしばしば用いられる比喩的用法、それは「語り」手が「語る」とか「語る」のを読者が「聞く」といった音声のメタファだ。いずれも文字のテクストを対象として、描かれた世界を読者が「見る」とかその世界について語られた言葉を読者が「聞く」といった、一見当然だがよく考えてみると奇妙な用語法を用いていることになる。そして研究用語の、論じる修辞の自明さが、しばしば見え難くしてしまう問題がある。

この場合、これらの言い回しは「読むこと」と「見、感じとること」、「読むこと」と「聞くこと」、というそれら両者の行為の間をすさまじくつなげて、その間に横たわる問いを抑圧する。この二つの系列の比喩は、テキストの語り方に関心を向けるナラトロジーにしばしば現れる透明と障害の二極性を持った思考に対応している。つまり語り手の語り方が読者に意識されない場合（透明）、「読むこと」は登場人物の「見ること」と同一であり、語り方について注意がなされるとき（障害）、読み手は「語る」声を「聞き」取ってしまう、というわけだ。

この二つの系列の比喩の自明性をいかにして解体する事ができるだろうか。あるいはそれによってどのようなことを問うことができるだろうか。読む行為の（過程的な差異）を問うとは、この「読むこと」を「見る」という知覚に似た行為として言語理解の過程でつなげてゆくその地点を問うということだ。だから「視覚的な」、「目に見えるような」という言葉で小説について語る言葉は、そうした印象を作り上げる私たちの過程、すなわちそうした印象を作り出す手がかりとなる言葉の特徴ばかりでなく、それが「視覚的だ」と判断する私たち読み手の判断過程として検討することができるといふことなのだ。そしてそれは同時にナラトロジーの提起できない問題を切り開くということでもある。

## 二・二 『春』における語りと効力

以上の考察からこれまで「語り手」の、あるいは描写の「主観性」、「客観性」などといった言葉で言い表されてきた問題を、そうした印象を形作る私たちの読みの過程の問題に置き直してゆく。ここでは、可変項の決定（分かりやすく言えば、誰が語っているか）と、そのもととなった情報（語られたこと）との間の位置付け（直接見て言っているのか、伝聞か、過去のことか、確信をもっているか、など）の問題としてとらえ直す。つまり、見ている地点、立場の割り出しは、最終的にはこの位置付けの問題となり、その情報がどれだけ信頼できるか、あるいは受け入れるべきかどうか、といった読者の判断の問題となる。この位置付けの問題を「確信度の問題」と呼ぶ。語りやテキストの形態の問題は、こうした読み手のテキストに対する信頼性、及びその判断の問題として取り上げられることとなる。

前節での、小説について語る言葉の問題にもどるなら、そうした言葉、用語における視覚的な比喩を用いることで前提とされ、問われなくなっている問題、そうしたメタファーが代行している問題は、この信頼性、信頼性についての読者の判断という問題なのではないか。視点や語りについての議論に分け入りな

がら、この確信度の問題こそが、透明と障害の二極的な思考に支えられたナラトロジーの思考の根底にあるという事態を明かして行く。ここではテキストとして『春』や自然主義期の諸々のテキストを取り上げつつ、時間的、空間的な諸々の判断の要因を分析するとともに、読者側の信頼性に変動をもたらすその効果を検討する。

ただし、ここでは、あくまでこの信頼性についての問題が、読書におけるもつとも重要な、あるいは本質的な要素をなしていると考えているのではない。むしろ、語りや視点を論じる研究者の関心の根底に、テキスト空間の信頼性を確定しよう、安定させようとする傾向が潜在しているということなのだ。そしてそれはまた、メディアの中で歴史的に生成されることとなった傾向でもある。そのことは次章で改めて問題とする。

## 二・三 『足跡』における語りの逸脱

これまで、語り方についての問題を、語り方への注意、関心という言葉で、それに対して下す読み手の時間的、空間的な様々な判断の仕方の問題へと移してきた。このように読む行為自体へと問題を移してゆくことで、テキストのスタティックの構造記述へと還元できないテキストの特性をも明かしてゆくことができる。前節において取りあげるテキストの要素は、そうした判断の要因をテキストから導き出して行く作業である。ただし、そうしたテキストの形態的な要素は、確かにそれを通じて私たちが小説の時空間を形作って行くうえでの主要な特徴とはなるが、そうした語りの形態の一覧表、分類図を作り出すことがねらいではない。そんなことをすれば「純粋な」形態記述という自閉的な目的に自身の記述を閉ざしてしまう。言うまでもなく、「時空間の基本情報」への着目、それによって手に入れる小説言語の安定した信頼性、といった読み方自体、特殊な読み方でもあるはずだ。テキストは、そもそも、そうした基本情報によって構成されるのみではないし、構成されるべきでもない。

これまで述べてきたような、基本的な時空間の枠組みから文学のテキストをとらえたところで、それは膨大な読みの場における様々な活動、その場に交錯する様々な作用関係を抑圧してしまうだけだ。それは文学テキストの無数の要素を、伝達行為への注意を引き起こすいくつかのバターンとそこからの逸脱という大まかな枠組みに解消してしまうだけだ。多くの小説はその細部において「基本形態からの逸脱」という形でしかとらえられなくなる。だが、まさにその特徴こそが、独自の効果を読みにおいて担っている場

合もある。読みの場を問題にすること、それは形態の分類、系統的な図式化によつては還元できない問題、その表現が何を引き起こすのか、という視界を開いて行く。ここではより細かくこの問題について徳田秋声『足跡』に則しつつ考えてみよう。ここでは、語りにおいてもたらされるテクストの時空間の情報をはじめとして、テクストの信頼性を確定する要因が極めて不安定で曖昧な点が見えてくる。その独自の効果についてここでは問題とする。

## 二・四 近代日本の二人称小説とその可能性

先に語り方に重点をおく研究の思考において、そこに特徴的な、潜在する二つの極性を論じた。それは透明と障害という極性だった。ここで読みにいて生じるテクストの語り方への注意、そしてその情報の信頼性の吟味、という読みの過程を考えた際にも、そうした極性ははらまれている。ただ、この論ではそれを、テクストの属性だと考える考え方を批判しながら、読みの過程への問いを開いて行くことに関心を向けているわけだ。こうした立場に立つことによつて、この章の冒頭で触れた、小説について語る言葉の表現や修辭の自明性を解体してゆくこと、そこで問題にできなかった問いを発することができるとも示しておきたい。

同様にして、「読むこと」と「聞くこと」とのつながりも、両者の間のつながりを読みにいて作り上げる私たちの過程として考えて行くことができるだろう。それによつて「話しているかのような」、「語りかけてくる」といった言葉で説明されることが、そういう判断を下す私たちの読みの過程と、その手がかかりとなる言語の特徴との関係として記述できるし、さらにはそのような判断がどのようにに歴史的に作り上げられてきたのかを問うてゆく地平も開けてくるはずだ。こうした観点から議論を展開してゆく。一体「話しているかのような」、「語りかけているかのような」文章とはどのような文章上の特徴が、どのようにして私たちに与えている効果を言い表しているのだろうか。そしてその機能を問うことにどのような意義があるのだろうか。そのような方法上の技法を取り込んだテクストの言説は、はたして私たち読者とテクストの言語との言わば対話関係をうながし、私たちを新たな言語の関係へと連れて行ってくれるのだろうか。それとも言葉の受け手を期待しない、自閉的な饒舌に終始するのだろうか。この両者の違いが生じるとすればそれはどのような理由によるのか。これがこの節での中心的な課題となる。

例えば一貫して誰かに呼びかけ、問い、さらに呼びかけられた相手に対してどのような反応を引き起こ

すかを絶えず想定し、それによつてさらに呼びかける自分自身への新たな視界を次々と開いてゆくような小説を考えてみよう。その時、私たち読者はその言葉の受け取り手を演じなくてはならない。私たちは空白として示された対話者を構成する。その条件となるのは「私」が知り得ぬ「お前」という空白だが、この両者の差異が、私たちを「私」の言語の中に引き込み、閉じ込める場合とは逆の効果、「私」とは異質の地点に私たちを定位する効果をも担う。こうした読み手の側の、言葉の受け取り手としての多様な水準を要請するテクストにおいて、先に述べた「対話性」の一つの技法的な実践をみることができる。むしろ、ここに「書簡体」や「二人称小説」といった議論も関係してくる。

したがって展開としては、次のようになる。まず、「口語性」や「話しているかのような」といった用語にかえて、読みにおけるこれらの効果をより明確にできるように用語の設定。すなわち「対話性」という曖昧な言い回しをはっきりとしたものにする。次に、その要素を技法として積極的に取り込んだテクスト群、すなわち「呼びかけ小説」の規定、それから、その一例として佐多稲子「乳房の悲しみ」の分析を通じて「呼びかけ小説」の可能性を探ることとする。ここでの試みはこれまでの「言／文」あるいはその「一致」、「口語／文語」といったレッテルに基づいた多くの言説や文章史観、というよりも正確にはそれらの言説が宿している強固な価値観に対する批判的な思考を続けて行けるかどうかにかかっている。

こうした考察は、これまでの文末や語彙の頻度によつて「口語性」を規定する立場では覆えない表現の多様性に踏み込みうるばかりでなく、これまでの「書簡体」「二人称小説」といった曖昧なジャンル規定で見えがなくなっている問題へのより生産的な取り組みともなるはずだ。例えば「書簡体」というレッテルを貼るのが困難なのは、ほとんどあらゆる記号が対者との場におかれれば「書簡」としても通用しうるからだ。したがって重要なのは対者を欠いた形態として「書簡体」のレッテルを貼って分類する作業ではなく、対者依存の一つのタイプとして、それぞれのテクストや表現が独自に組み込み、変形した対者依存のタイプ、技法としてその可能性を探ることだ。

## 第三章 近代読者の生成と変容

### — 小説と読者のパラダイム —

## 三・一 読みはいかに作られるか



読者がテキストを「読みつつある」時間を、あるいはそこでの読みの過程的な変化を問題にする、という言い回しを前章では用いた。とはいえ、「読みつつある」という表現は一見自明に思えるが奇妙な表現でもある。こうした言い回しは、誰しもが経験しているという強力な前提（誰しもが読みつつある時間を経験しているから）によってたいして疑われもせずに使われてしまう。だがこの読みつつある時間、という言い回しは、それ自体奇妙どころか危険な表現でもある。

というのも、こうした言い回し、こうした思考は、読む「私」とテキストとの読みつつある「一回的な」、「現在の」関係を問うことに、しばしば至上の理論的な純粹さを与えるからだ。確かに、それによって既存の権威化した読み方やこわばった解釈体系、己の解釈に永続性を与えようとする諸言説を解体し、批判する道具をそれによって手に入れることができるかもしれない。永続的で超越的な解釈に対して、私たちはそれぞれの自由で流動的な読みの現在を対置することによって批判することもできるだろう。だが、それによってできるのは、せいぜい既存の解釈共同体を解体する幻想ぐらいのものだ。それは楽天的な幻想にすぎない。そこには同時にいくつもの陥穽もあるからだ。それは、その他ならぬ「私」の「現在」が、既に常にとらえられている牢獄を見えないようにしてしまうという陥穽である。しばしば歴史性という曖昧な名前で呼ばれるこの牢獄を見え難くしてしまうのだ。読みつつある「私」の「現在」しかないのだ、という思考は、そうした読み方自体が様々な制度によって生み出され、今なおそれらによって差し買かれていくことをしばしば見えなくする。読みつつある現在の私を特権化、中心化して、それ以上自身への問いかけを拒否する思考の陥穽がそこにはある。実際、読みつつあるときにはじめてテキスト空間が姿をあらわすという「現前化」の思考がはらむ、読みの歴史性の隠蔽についてはすでに第一章で指摘しておいた。そこには、私たちが「読みつつある時間」自体を問題にしようという思考が、その時点を「記述している時間」とのずれを見えなくする（と同時にその時点について論じる特権的な地位を手に入れる）思考につながる危険性が常にあるのだ。

読みは、私たちが意味を生産する過程と云ってよいのだが、そしてそのようなプロセスの差異を前章では積極的に目立たせるようにしたのだが、むしろ同時に読みはそれ自体生産され、訓練された技術でもある。それはあからさまな読み方教育から、書物の形や印刷の形態によって慣らされる、より感知しがたい読みの慣習にいたるまで。あるテキストを教義的に読むにしろ、作家の思考を読むにしろ、人生訓を読むにしろ、それは様々な場で教育された技術に他ならない。あるいはもっと大きく言えばどのような書物が、どのような場所で手に入り、それをどう扱うべきかといったかなり漠然とした情報もまた読み方を作り上げていく大きな要素だ。さて、このようなことを読みについて考えるときにも問題化できるようにするには、どのような道具立てを考えてゆけばよいのだろうか。つまり読み自体が生産されるという事態そのものを問題化して行くには、どのように「読者」という言葉を用いればよいのだろうか。

繰り返しになるが、前章では読者をその読みという意味生産の過程的な差異を明かす道具立てとして考えた。この章で持ち込みたいのは、読者を、それ自体いかに作り上げられるか、といった差異をそこに見いだすために用いることだ。ここではそのように読者を「つくる技術」に焦点を当てたい。先に、読む行為はそれ自体生産されると述べた。そして読みを生産する歴史的な要因を「技術」として見てみよう。ここで「技術」といつているのは、先に述べたように印刷や出版技術といったハードの技術も、教育方法といったソフトの技術をも射程に入れて用いている。そうした技術的な差異は、かなりはつきりとした形でその変遷や広がりが見え難く、すでにそれはメディア論という形で、あるいは教育や行政上の諸制度の歴史という形で、多くの議論がなされてきている。むしろ例えば一つの喧伝されたイデオロギーでさえもそうした技術として考えねばならないだろう。まさしくそれが意味の生産の指針となることもあるからだ。こうしたことについては後に詳しく触れことになるだろう。そしてそれぞれの技術に依拠して生産される差異として読者はある。つまり読みの慣習を作り上げるような多様な「技術」を探ること、それによって作り上げられた差異として読者をとらえること。そうした差異を、歴史性を明かしてゆく手掛かりに用いるのだ。したがってこの章では、読みにおける過程的な差異と、それを生産する様々な技術とを交差させるよう努める。

ここでは、まず読者と記号表現の速度の問題をとりあげる。記号とそれを受け入れる理解の体制との関係。速度の問題は、読みにおけるプロセスの差異と、技術によって作り上げられる読みの体制の差異とを浮かび上がらせるためには格好の材料となるだろう。つまり、まず私たちが受け入れる記号がいかに読みという理解の過程で受け止められてゆか、という読みの過程の問題と、そのような理解の体制を形作るような技術的な要因、記号表現の生産、流通の諸問題とを取り上げ交差させるために格好の問題となるのである。それら技術の諸様式は、どのような読みの体制を作り上げているのか、あるいはどのような変貌を遂げて来たのか。そうしたことについて考える試みをしてみよう。その試みを通じて、前の章で批判した障害と透明の二極的な思考は、それ自体作り上げられた読み方であり価値観であることをも明かしてゆきたい。ここでは長塚節『土』の表現を手掛かりにしながら論じたい。

次に取り上げたいのは、主に読者と記憶の問題だ。この問題もまた先の二つの差異を立ち上がらせてゆく有効な焦点となるだろう。つまり読みつつ思い出す私たちの読書の過程を一方では問題にし、またそのような記号に対する読者による時間的な編成、処理の仕方が、それ自体どのように作られて来たのかという問題を交差させることができるだろう。そこでは、読みは、私たち読者が読みつつ思い出す、その過程における差異を際立たせながら検討されるときに、教育学、心理学の言説の分析を通じて生成、拡散する技術、いわば内面の支配術によって歴史的に作り上げられる理解の体制の歴史的な差異の中でそれをさらに検討するという作業が行われるだろう。そこでは中勘助『銀の匙』の表現を手掛かりとして用いたい。そうした中で、いかにして読みが作り上げられるか、について考えるいくつかの分析の道具を手に入れ、行くことができるようになる。言うまでもなく、この問題自体はきわめて広範で、様々な分野の調査を前提として進めて行くことが必要となる。ここでさらに焦点をしばって考えたいのが、『教育』の言説だ。読みを規制する技術の中でも、極めて大きな影響力をもってきた技術。ただ、ここで問題にしたいのは、教育の領土における小説の解釈の仕方、方法についてのあからさまな手法についてではない。そのようにはつきりと方法化された読み方を批判するのは、比較的簡単なことなのだ。ここで取り上げたいのは、ほとんど意識されないほどに私たちに読み方、情報の理解の仕方を規制している思考の制度なのだ。すなわち私たちの読みの前提となり、気づかぬ内に読みの慣習の枠組みをなしている考え方がどのようになっているのか。教育の言説を通じてできあがってきたかについて考えてみたい。それを、ここでは教育雑誌『教育実業界』の諸表現を通じて考えることにしたい。また、さらにそこでは、これまで十分ふれることのできなかった、読みにおける男女の差異の問題にもふれることができるようになるだろう。読みにおけるこの差異の生成は、次章での主要な課題でもあるが、それにつなげてゆけるようないくつかの切り口を提示したい。

さて、まずは速度の問題からはい。繰り返しになるが、この速度という観点こそが、この章での二つの差異を際立たせる有効な道具となる。記号を受け取る私たちの読みの過程、反応の過程で生じる差異を際立たせ、一方で私たち読み手の理解体制、あるいは読み方の慣習が、どのような技術によってどのような方向付けられ、作り上げられてきたのかという歴史的な差異を際立たせ、両者を交差させながら議論を進めること。一言で言えば、読書の過程的な差異と、技術的な差異を交わらせながら、歴史的な問いを発すること、見いだすことがここでのねらいとなる。

### 三・二 『土』の諸表現と読者

伝達の速度や効率を重視する価値観においては、その極限に透明なる模写（障害0）が想定され、それに対する障害はただ否定的に排除すべきものとして価値づけられる。そしてむしろここで評価したいのは、見定めたいのは、むしろ速度の障害、攪乱としての言語の機能なのだ。あるいはまったく別種の価値ある速度を検討する試みでもある。それは速度障害としての言語、どうしようもなく言語であることを露呈し、前景化してしまう空間表現なのだ。したがって以下において、『土』の表現をてがかりに私たちが接し、手に入れようとする空間を攪乱し、障害を持ち込む諸手法についてとりあげることにする。その後、逆に速度の極限へと方向づけられた諸表現を、主に同時代の掲載媒体、新聞表現を軸に考えることにする。その上で、そうした諸制度の中での表現の可能性について改めて検討することとしたい。

様々な表現を通じて広範に根をはりつつあったいわば伝達の速度や効率を至上とする体制、それへの表現の繰り返し込みや、それに応じた読み手の知覚の制度化の一端を見てゆくこととなる。ここでは『速度』を、例えば交通機械という物体が動く速度と、それまでに論じた様々な記号がおよびている速度という異なる用法として混在させて用いているのではない。ここでいう『速度』は私たちと空間との接し方の差異を私たち読者の意識の内に作り出す運動なのだ。それゆえ、それは交通機械によっても、言葉によっても、同じく論じられるべき問題なのだ。ところで、こうして作り上げられる知覚と言語の体制の中で『土』の表現がそれらを打ち壊すような価値があったなどという史的位位置付けをしようとしているのではない。ここで同時代の表現について考えたのは次のねらいからだ。まずこれまで言及してきた『土』における空間の言語表現の独自性を浮き立たせること。次に、そうした制度化された表現によって作り上げられて気付かぬほどに『あたりまえ』になってしまっている現在の私たちの読み方に注意を向けること。そしてそこから、そうした現在読む私たちの前提となっている知覚の制度の中で、『土』の言語表現の持ち得る可能性を検討することである。

こうして私たち読者を組み入れた検討によって、描写の問題は、現在の私たちを貫く知覚と、それを成り立たせる権力の技術の問題として考える展望がひらけてゆく。むしろその中で、文学表現が私たち読者にもち得る効力を考えるという展望も開けてくるだろう。

### 三・三 『銀の匙』と読者の記憶



読む行為における過程的な差異と、読む行為を歴史的に生成する技術的な差異とを交差させる試みをも一つ実践的に試みてみよう。ここで次にとりあげたいのが読みにおける記憶の問題だ。読む行為は絶えず読み手の記憶の参照、変形、再編成といった、過程だ。読みつつ、私たち読者は自らの記憶を綴り合せてゆく。それはあるテクストの直前の一節でもあろうし、それまでの登場人物の一連の行為の場合もあるだろう。だが、そうした読みつつあるテクストのリニアな情報の堆積のみならず、読みはしばしば自身の個人的な体験や、過去の膨大な記憶のネットワークを往還する過程でもある。したがって意識している場合であれ、さほど意識しない場合であれ、私たち読者は読みつつ思い出しているのだ。そしてある種のテクストは、そのような読者の思い出すという行為を積極的に促し、ときに攪乱しつつ、読者の過去そのものを新たなテクストとして生成しさえするだろう。ここで特に関心を向ける回想小説の形式はこの点、多くの魅力的なそうした手法を見いださせてくれるだろう。読みつつ思い出す読者に対するテクストの作用を考えること、それによって読みつつ思い出す読み手の過程的な姿を描き出すこと。それがこの節でのねらいとなる。以下において、特に『銀の匙』の表現をこまかく取り上げながら、論じてみよう。そしてそれにもう一つ。先に述べたように、そうした読みの過程的な差異に加えて、もう一つの差異の軸を交わらせるのがこの章でのねらいだった。それは読む行為自体を生成する技術的な差異だ。この場合、それは読者の記憶、あるいは思い出す行為そのものが、すでに歴史的に作り上げられて来た思考の制度の内にあるということに目を向けることとなる。

ということとは、そもそも読みの過程における記憶について考えるには、それと同時に、それに交わらせる形で、思い出すこと、覚えておくことがそもそものようなことだと考えられて来たのか、そうした考えはどのような形として形成され広がっていたのか、ということを経史的に問い直す軸を用意しなくてはならない。すなわち、読者の理解の仕方や、解釈戦略を歴史的に寄生し、方向づけている力をここでも考えたいのだ。一言で言えば、読みのパラダイムを考えたい。ちょうど速度の問題において、速度にかかわる私たちの技術的な差異（出版メディアや交通機関の変貌によって読み手に引き起こされる差異）を問題にすることを通じて、記号表現を受け止める読み手の活動の歴史性を照射しようとしたように、記憶にかかわる様々な技術的な差異を問題にすることを通じて、言葉を受け取りつつ思い出し、記憶する読み手の活動を歴史的に照射できはしないか。ここでは、その記憶に関する技術的な差異を、具体的には教育雑誌という技術を通じて考えた。これもまたそうした思考や記憶の体制を形作る歴史的な道具立てのごく一部にすぎないだろう。そもそも活字文化そのものが、特異な記憶の形を作り出してもいるのだろう。そうした意

味ではごく限られた部分的な調査にすぎないことは否めないが、それでもこの問題を曖昧なままで論じてゆくわけにはゆかない。そういうわけで、ここでは『銀の匙』の表現から、私たち読者とテクストとの作用関係を記憶という観点から描き出し、そのうえで、そもそもそうした読者の「思い出す行為」自体がどのように歴史的に作り上げられ、変貌してきたのか、という問題の一端を当時の教育雑誌の諸表現を参照しつつ考えてみた。その後、今度は問題を教育の言説の機能に絞って、教育雑誌の表現に関する検討を行うこととする。

### 三・四 「教育小説」の諸相と読者のパラダイム

さて、この章の最後として、おもに二つの作業を行っておきたい。一つは、明治三〇年代後半における教育雑誌という媒体を通じて、その雑誌の表現が読者との間に作り出す認識の枠組みを割り出すこと。もう少し平たく言えば、教育雑誌の諸々の言説が複合的に作り上げる児童の「心理」や人間の「内面」の読み方、解釈の仕方の大枠（パラダイム）を明らかにして行くこと。もう一つは、そうした教育雑誌の言説、具体的には「教育実践界」を扱うのだが、そこに掲載された「教育小説」というジャンルを検討すること、そしてその言説における男女の表象の仕方を追ってみること。

この二つの作業を進めて行くのは、むしろいくつかの点がある。まず教育雑誌、特にこの時期の教育雑誌を扱うのは、教育ジャーナリズムの隆盛とともに、児童を観察、実験、記述するシステム、児童に向けられたそうしたまなざしが生成してくる時期であり、それはまさに教育雑誌という媒体の実験報告や観察記録や教育方法の試みの中に刻印されてくるからだ。そしてまたそうした教育雑誌の言説と読者との関係を通じて、児童や内面の捉え方、考え方は、ある種の読者の思考の枠組み、道具立てとして自明の前提となり、流通し、根をはってゆくものでもあるからだ。特に「教育実践界」は、教育界の時事的な話題よりも、教育の実践的な試みや記録、報告が中心になっていたり、また、東京での一部のメンバーによって作られるのではなく、広く全国からの寄稿によってなっていたりすることも、こうした点を検討するには適している。このことは前節において残しておいた問題でもある。

## 第四章 近代小説と解釈集団

——小説掲載媒体と読者の関係を軸に——

#### 四・一 解釈集団の力学

これまで述べてきたことを「読者」という用語の用い方を軸に大筋でたどってみながらここでの章での問題をはっきりさせておこう。まず、「読者」という用語を用いるやいなや、多かれ少なかれ諸々の読者の差異を見えなくしてしまいうことを再度確認しよう。その用語は読んでいる読者や読み終わった読者、あるいは現在の読者や過去の読者、あるいはここに表示されている用語「読者」と読んでいる「あなた」との差異、さらには読んでいる「あなた」とその「あなた」について考える「あなた」自身との差異を見えなくする傾向を持ちうる。重要なのはそのようにこの用語「読者」を（用いる）ことができる、ということだ。そして逆にそのような差異を際立たせるように（用いる）こともできるということだ。そしてこの書物でできるかぎり試みているのは、読者という用語を、後者のように差異顕在的に用語「読者」を（用いる）こと。そしてそのことによって問えなくなっている問題、考えることができなくなっている「学」の当然の前提を問う直すことだったわけだ。

第二章では特に読みの過程における差異を際立たせられるようにこの用語を用いた。つまり「読者」を読みつつ、刻々変貌する様において描き出すこと、「読者」を無時間的で確固とした不変的な用語から奪い返すこと。また、それが言語という「学」の背後に抑圧された問題をいふり出す手段ともなりうることを示した。

第三章で「読者」という用語を用いることによって際立たせようとした差異は、一言で言えば読者のパラダイムの差異といつてもいい。つまり読み方、解釈の仕方は、様々な要因によって作り上げられてきたわけだし、私たちの読み方はそういう意味では色々な前提や当然の約束事、をたくさんもっている。そうした理解の枠組みの差異という形で読者を描き出すことに重点をおいた。それを、第二章の読みの過程における読者の差異を描き出すやり方に交わらせるようにして書いていく。

だが、ここではっきりとしておかなければならないのは、それでもなお、これまでの記述で用いてきた用語「読者」が抑圧し、隠蔽する読者の差異はいくらでもあるということだ。例えばこれまで描き出してきた「読者」にしても、ひどく実体を欠いた抽象的な場所のように論じている。ではいったい私たちがすぐにも思い浮かべるような読者の差異、女性読者や男性読者、子供読者や老年の読者、都心の読者と田舎の読者、インテリの読者と通俗的な読者等々といった差異はどこにいつてしまったのか。もちろん「イ

ンテリ読者」や「男性読者」などというものははっきりしない集団だし、それ自体確定しがたいどころかそうした集団を描き出せるかといえればそれは疑問だ。そうした集団がとらえがたい、論じがたい、あるいはそもそもそのようなはっきりとした「集団がある」という思考自体幻想でしかないとも言えるかもしれない。だがしかし、幻想であることはそうした集団が機能していない、ということの意味しない。実際にどこにどれだけの数でどうしているということが捉えられなくとも、単に想像上の（用語上の、統計上の）集団であるにしても、そうした集団が政治的に、あるいは経済的に機能している現在の事態にかわりはない。

早い話が、女性雑誌一つとってもその表現や記事の選択はほとんど五才刻みの読者集団に向けて差異化しているではないか。つまり常に既に、いたる場所で、読者は想像上の集団として細分化され、消費者としてターゲットとされている。むしろそれは特定の媒体に限ったことではなく、教育の場で、行政の場で、読者はしばしば集団として細分化され、名指され、想定されて実際の諸制度を動かしているのだ。こうした差異がこれまでの記述であり顕在化しないのは、この論自体がかなり限定的な解釈集団に向けられているということにも理由がある。つまり文学研究という枠組みの中で問題をとりあげ、論じてきている。けれど、そもそも読みの場を問題にするということは、それがまさに雑多な記号が流入してくる場であるがゆえに、単に純粹に小説ジャンルにのみ向けられた研究にとどまらない、幅広い記号表現の問題に分け入ることができる、ということでもある。そこには漫画や広告の表現、書物形態や映像表現等多様な記号の中で受け取られる言語を考えることさえできるはずだ。

そこでこの章では、様々な表現と、そこで想定される読者集団の差異やその機能について考えた。そうした解釈者集団はいかにして表現によって作り出され、また逆に表現を規制するのか、あるいはいかにして読む行為にかかわってくるのか。ここでは読者という用語は、その集団的（といつてもそれは表象上の集団だが）な差異を際立たせるように用いてみることにしよう。むしろこれまでの読者の差異顕在的用法ともかかわらせながら。以下では、特に雑誌媒体の表現に焦点をあてる。「雑」な表現の混在するこの場所こそ、読みの理論の可能性の地平を検討する格好の場所となる。

#### 四・二 「婦人画報」の夢見る規則

例えば雑誌に掲載された小説一つ読む時でも、私たちは小説の言語「それだけ」を読んでいるわけでは

ない。その小説は、そのまわりに漂う様々な水準の言語や多様な記号表現にまわりつかれながら私たちに読まれている。例えば小説の言説は広告コピーや批評の言説のただ中で、言語表現は文字の形態やレイアウト、写真表現のただ中で享受されているのである。にもかかわらず、しばしば小説のみが自立した対象として論じられる。それは何よりも、それを読み、そこにかかわってゆく私たちによって作り上げられる読みの場を思考の埒外におくからだ。複合的な情報が交差するその場所を視野に入れば、そもそもそうした論じ方自体が奇妙でさえある。

ここで明らかにしてゆきたいのは、まさにそうした混在する記号表現のただ中で作り上げられるその地点、読書行為の場なのだ。そこで、ここでは様々な記号表現によって織り成される雑誌を、それ全体として一つの表現としてとらえ、「雑誌表現」として問題にする。そして、その複合的な表現によって生み出される私たちの読みのシステム、あるいは読みのプロセスを探ってゆくことをねらいとする。そして小説の言説の可能性も、そうして作り上げられる「読み方」の中でとらえることができる、と思う。

ここでは主に大正後期の「婦人画報」の雑誌表現に焦点をあてる。それは画報という複合的なメディアが、印刷技術の発達に応じて、多くの写真表現を取り込みながらできあがる空間であり、広告表現や論説、文学の言説が互いに依存し、その効果を波及しあいながら、情報の、ある受け入れパターンを、いわば読みのルールを私たち印づけてゆく様子を明かしてゆくには格好の対象となるだろう。

雑誌の雑誌表現についての検討を簡単に概観するならば、まず指摘したのは、ものを買うことによって幻想を満たす、夢見る、というプロセスが、情報の受け入れ方、いわばメタ情報として私たち読みに発信され浸透してゆく点だ。そのうえで、読むことによつて同じような夢の見方を抱え込んだ幻想の共同体、すなわち想像上の読み手集団が読み手の内に抱え込まれ、そこに読み手が溶け込んでゆく、そういうプロセスが読み方としてできあがってゆくことを指摘した。さらに、「婦人画報」という媒体が、この買うこととの幻想と読むこととの幻想とが限りなく重なり合う場として機能するということ、つまり雑誌を読むという意識のプロセスと、ものを買う、買物をするという行為にともなう意識のプロセスが、重なり合う空間を作り上げること、言わば買う行為の隠喩としての読む行為が形作られてゆくことについて問題とする。婦人雑誌の雑誌表現は、買うこととの幻想と読むこととの幻想を限りなく交じりあわせる場として機能し、私たち読み手に、同じ夢見るルールを抱え込んだ幻想の共同体、すなわち読者集団の中に溶け込み、はまりこむ慰安を提供する、ということになるだろう。

しかしながら、そうした慰安は常に疑念的に、一時的に満たされるに過ぎない。実際には共通の価値の

尺度を了解しあつた、そのような共同体はどこにもない。読み手が都合よく作り上げ寄り掛かる幻想の集団は、そうした性格ゆえ実際に私たち読み手を取り巻く別の諸価値の体系に絶えず脅かされる脆弱な集団に過ぎない。そしてまた、その慰安は、それが満たされた瞬間にその代償として、他でもない読む私自身が、複数の読み手の中に溶解してしまい、見失われてしまう不安に絶えず脅かされてもいることになる。そこで、それを解消するためには、私たち読み手は絶えず雑誌表現の内側に、その幻想のより所、ルールを確認し安心する果てしない反復を求めることになる。ちようど依存症のような状態が生まれる事態を明かして行く。

その一方で掲載小説の表現の可能性も考える。小説の言説には、あるときは雑誌表現の作り出す共感、同情する幻想の集団の不在を私たち読者につきつけ、あるいは、そうした雑誌表現の中に耽溺することの背後に抑圧される関係をさらし、その耽溺の快楽が同時に仮想の集団のまなざしの中で行動不能に私たちを追い込んでゆくというシステムを前景化する、といった多様な表現の可能性を見いだしてゆくことができる。

#### 四・三 「中央公論」、逸脱の脅迫

雑誌を手にとる。評論や小説、広告といった混在する記事に目を走らせながら、私たち読者は書かれたこと、以上の様々な約束事をそこから理解するとともに、まさにそうする自らの力によつて自身の思考を縛り、規制して行く。そこでどのような問題が扱われるべきであり、どのような人々が書くべきであり、どのような用語を用い、どのような解釈のシステムに準拠するべきかといった様々な暗黙の前提が送り出され、それを読み取ることによってそうしたいわば思考の作法、枠組みの中に私たちはとらわれてゆくのだ。ここで「中央公論」という雑誌媒体について検討するのは、そうした雑誌表現の効力について明かしてゆきたいからだ。そして文学の言説をも、そうした読む行為を規制してゆく雑誌表現の中で検討してみたいがためだ。

特にこの雑誌媒体を選ぶこと、そしてまた、特に一九一〇年前後に焦点をあてることの戦略的な意味は、そうした雑誌という読みを規制する装置が、「性」という規制の装置が作り上げられて行く過程と重なり合いつつ、強力な想像力の枠組みとして、イメージの規制力として、読者に浸透して行く地点を検討したかったからだ。それは何も道徳的な退廃や自由思想の蔓延、宗教の衰退や家長の権威の失墜といった決ま

り文句を取り上げたいということではない。それならば何もこの時期を扱う必要も、雑誌というメディアを特に問題にする必要もない。そうではなく、それによって有為の学生男女がそこなわれ、それによって社会の秩序がおりやかされ、あるいは逆にそれによって健全な社会や国家が作り上げられる、かのように思わせる技術として、それ（性）の問題が前景化してくる地点が、そうした問題の前提が様々な記号の戦略の中で作り出されてくるその地点こそが、ここで問いたいことなのだ。

そうした危険極まりないものとしての、それゆえ管理と規制を当然のものとして導入、拡散してゆく技術ともなる「性」がどのような形で雑誌という読書装置の中に根付いてゆくのだろうか。どのような形で読みを規制し、方向づけ、理解の枠組みを作り上げて行くのだろうか。この時期の「中央公論」は、男女学生をはじめとする「読む―書く」階層といういわば知の領土をめぐるつくりひろげられる、多様な支配のテクノロジーが交差する地点として多くの問題を提起してくれるだろう。

むしろこうした思考は、現代における「性」の問題系が作り上げる「健全」あるいは「逸脱」、「異常」というレッテルのなう役割にも通底しているし、それらが隠蔽する権力の技術の強化についても同様だが、しかしながら早急に状況の差異を切り落として一般化した言い回しに回収してしまうのはよそう。この検討のもくろみが、そうした権力を担う装置へのまなざしとして、絶えず現在の私たちの読書行為の枠組み自体への問い返しという問題意識の上にあることを確認しておけばそれでよい。ここでは、この雑誌で議論されている多様な問題について、それらを結び合わせ、それらを通じて自らの管理技術を拡散させてゆく連なりとしての「性」の問題系、ネットワークの生成を問題にする。その過程の検討を通じて、この雑誌と読み手との間で作り上げられる様々の決まり事とその規制力について考えた。その上で、それらがどのような「雑誌表現」の手法によって読みの回路を作り上げ、いかにして読みの過程を方向づけ、規制して行くかを具体的な用語やレトリック等表現の手法のレベルで論じた。そして最後に、そうした中で文学の言説を検討して行くことで、何が見いだし得るのかを取り上げることになる。

おわりに 読書論からのアプローチの可能性

#### 第一章を受けつつ――

第一章から、第四章まで、読みについて注目すること、読む行為自体を問題化することによっていかなる問いが可能になるかを追求してきた。それが本論での一貫した姿勢であり、問いかけでもあった。言っ

てみればこの論は、そうした読みについて考え、問題化するための様々な道具立てや材料を提供すること、そしてそれをまた実践的に適用してみることを目指して書かれている。そこで最後に、そうしたこれまでの章で明かしてきた事柄を、読みの理論の可能性を検討するという観点から簡単に俯瞰しつつ、併せてそうした自身の議論自体がはらむ問題点をも批判的に少し検討しておくこととしよう。

第一章では、一言で言うところ、「性」の「領土的思考」を揺さぶるための読書理論の有効性を問題としたが、この問いかけは、後の各章においても基本的なスタンスとして各種の問題提起につながっている。第二章では、文学について語る言葉、その客観性、用語やレトリックの自明性について問題化することになった。そこで読むことに焦点をあてる有効性は、読みの結果的な印象としての判断（見ているかのような、話しているかのような、適切な、等々）をテキストの普遍的な属性とすることに疑問を投げかけることだった。それらはあくまで多様な読み手の判断の過程の中にあり、そうした読み手の判断の過程に焦点をあてることを通じて、どのようなテキストの形態やテキスト外の情報がいかにかわってくるかを問題にしてみることができることになる。第三章では、そうした読み手の読み方の慣習や理解の仕方、解釈の枠組みがどのようにしてできあがってきたのか、それをどのようにすれば問題化できるか、についても関心が向けられてゆくことになる。つまりそうした読み手の解釈の枠組み自体を歴史的に規制する様々な技術について考えてみようとしている。第四章では、読みを規制してゆく解釈集団の生成とその規制力について考えた。そしてまたそこでは、文学研究という解釈集団の中では問題になりがたい、諸々の記号表現をも対象とすることとなった。

こうした分析を通じて、私たちを貫いている様々な読みの枠組み、不自由さ、あるいはにもかかわらずそれを隠蔽する「学術的」言説についてとらえ直すこととなった。また、そのためのいくつかの分析の道具立てをも提示してきた。むしろそれは同時に、ここでの自身の言語、用語もまた、そういう意味では様々な制度や規制にとらえられてもいることになる。とはいえ、論じ、語る主体の「特殊さ」を問題化する様々な道具立てを読みという観点から提供することが狙いである以上、それはこの論を読む側へと受け渡される問題に他ならない。そうした自身の論自体への批判的考察を最後に加えて論を閉じることとする。